

尚恵学園コスモスにおける日常支援を生かしたクリスマス会の試み

川島益雄

Attempt to hold a Christmas party using daily support at Shoukei

Gakuen Cosmos

MASUO KAWASHIMA

January 28 , 2025

要 旨

尚恵学園デイサービスセンター「コスモス」は、生活介護を要する方々の支援をスタッフ 16 人で取り組んでいる。「コスモス」における利用者様の多くは強度行動障害の人である。5～6 年前から利用者様における強度行動障害者の割合が年々高くなってきている。強度行動障害者の割合が高くなればなるほど行動問題の発生率は上がってくる。これら日常的に起きる行動問題に対応すべき対策を 4 例ほど取り上げ論文として公開してきた。これらの論文を読んでいただけると理解していただけるが、「コスモス」において支援員は利用者様の行動問題に真摯に向き合い少しでも解決していこうと奮闘している姿が見えてくる。特に、午前と午後に行われる全員参加の「活動の時間」と「昼食時間」にすべての支援員ではないが「だめなもののはだめ」という考えのもとに神経をすり減らしながら利用者様と対峙している。

全員参加の「活動の時間」におけるウォーキング、缶つぶし、運動プログラム、運動プログラムミニ、学習プログラム、音楽活動、室内ウォーキング、制作活動、集中課題、個別課題、念入り掃除等の中で、利用者様が「ルールを理解する」「ルールを守る」「我慢する」「待つ」「意思表示をする」そして最も重要な「指示が入る」という各要素を身につけていただきたいと実践している。「指示が入る」とは利用者様が支援員の指示に従うことではなく支援員の話聞くことができると理解していただきたい。利用者様が「いやです」「わかりました」と意思表示をすることも大切だからである。このような活動を根気強く続けていると 3 年前頃から「活動の時間」「昼食時間」「休憩時間」にある一定の法則が見えてきた。それは他人を観て行動することである。母集団と思われる行動が一人一人の行動問題を吸収していくのである。このため「コスモス」で利用者様が過ごす時間がゆったりと流れることが多くなってきた。そこで、利用者様が身に付けたスキルの発表の場を設けたいと考え、2024 年のクリスマス会を実施した記録である。

はじめに

筆者は「コスモス」で13年間働いている。その間、不意に後ろから突き飛ばされ転倒し全身打撲で病院に行くこと2回、肋骨の骨折2回、眼鏡の破損10数回、叩かれることは数え切れない。筆者が利用者様から受けたこれらの行為はすべて筆者の利用者様に対する不適切な対応に起因している。スタッフの対応が適切であれば利用者様の日常生活はいたって穏便に時間が流れる。それなのに筆者はなぜこれほどまでの利用者様からの攻撃を受けているのか。答えは簡単である。筆者は利用者様に対して「だめなものだめ」という対応をすることからである。誤解を生じるといけないので、筆者は「だめなものだめ」を徹底してはいない。利用者様の意思決定を尊重しながら意思決定支援を基盤に対応している。迷うことは多々ある。例えば、筆者とウォーキング予定の利用者様が「歩きたくない、ドライブ班と一緒にバスに乗りたい」と意思表示したときである。この場を穏便に済ませるためにはバスに乗せることである。バスの座席も空いている。しかし、筆者はウォーキングに行くことを説得する。勿論、利用者様は納得などしない。この場合、「我慢する」「だめなものだめ」を優先する。なぜか。筆者は利用者様の支援目標を「社会に出て自立して生きること」としているからである。強度行動障害の人が自立できる確率は0.1%にも満たないと思っても「社会に出て自立して生きること」の夢は捨てきれないのである。

数年前、利用者T様は「コスモス」の花壇に植えてあったサルビアの花と葉を多数むしり取り自分の口に放り込んだ。丁度居合わせた筆者は「だめです。食べません。」と言って口からサルビアの花を出させた。この一連の風景を見ていた職員A氏は「この方は小さいときからおばあちゃんと畑で過ごしていたので草をむしったり食べたりすることが唯一の楽しみかもしれません。食べさせてあげてもいいのではないですか。」と言われた。筆者は職員A氏に向かって「K様は1年前までは草など食べませんでした。育ちが原因ではありません。本人の意思決定だといっても食べさせてはだめです。」と反論したかった。しかし、A氏は上司であるためグッと言葉を呑み込み苦笑いしながらその場を収めた。この件の支援の在り方を議論する気持ちはないが、利用者様の支援目標を「社会に出て自立して生きること」と設定したならば正解は見えてくる。

「コスモス」の支援員は意思決定支援の考え方を意識の根底に据えながら利用者様の生活介護に励んでいる。支援員全員が同じ目標に向かって仕事をしているという姿は見られないが利用者様に充分すぎるほどの愛情を持って接している姿は痛いほど感じる。これらの支援員の方々の努力が「活動の時間」におけるウォーキング、缶つぶし、運動プログラム、運動プログラムミニ、学習プログラム、音楽活動、室内ウォーキング、制作活動、集中課題等で実を結ぶことになった。筆者が13年前に「コスモス」に配置された頃とは全く違った風景が見えてきた。特に、ウォーキングと運動プログラムにおける利用者様の動きが著しく変わってきた。利用者様の中で模範的な行動をする母集団が形成されてきたのである。この母集団が行動問題を起こす利用者様を包み込んでいく現象が見えてきた。

今回のクリスマス会においては目標を「楽しく過ごすクリスマス会」だけではなく、プラスして「私たちの成長した姿も見てください」という意味も含めて行ったクリスマス会の実践記録である。母集団の形成の重要性が見えてくる。

日常支援における活動の変化

日常支援となると多くの場面が想定される。ここで取り上げる項目は支援員の方々が創意工夫のもと努力と根気強さで日常支援の係わり方を顕著に改善していった項目に限定する。

1 「活動の時間」における実践

活動の時間について、筆者が何度も管理者に提案しているのは1週間5日の午前・午後に行われる活動の固定化である。例として挙げてみる。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
午前 10:00 ～ 11:00	運動プログラム・集中課題	ウォーキング 室内ウォーキング (ミニサーキット)	ウォーキング 室内ウォーキング (ミニサーキット)	運動プログラム・集中課題	ウォーキング 室内ウォーキング (ミニサーキット)
午後 13:30 ～ 14:10	ウォーキング 室内ウォーキング (ミニサーキット)	学習プログラム 音楽活動・制作活動	運動プログラムミニ 音楽活動・制作活動	ウォーキング 室内ウォーキング (ミニサーキット)	念入り掃除 ウォーキング 個別課題

雨天の場合：缶つぶし 個別課題 学習プログラム 室内作業（受注作業につなげるための活動）ドライブ

上記のような提案をしているが実現はしていない。是非は問わないが、活動の時間はウォーキングとドライブを主体とした不定期の活動が続いている。つまり、支援員の方々は当日の朝に 掲示板を通じて自分の担当する活動の種別と担当する利用者様が知らされる仕組みになっている。筆者は朝一番に掲示板を見て、利用者様の受け入れをやりながら今日 1 日の活動内容の詳細をシュミレーションすることが日課になっている。活動の変更は

日常的に行われその度に活動内容の詳細をシュミレーションすることとなる。何はともあれ、「コスモス」における「活動の時間」における利用者様と支援員の様子を明らかにしていく。

①ウォーキング

2020年に発表した論文『尚恵学園 障害福祉サービス「コスモス」における発達障害者の支援に関する実践的研究』にウォーキングについての考え方が詳しく書かれている。論文を読んでいただいた方には申し訳ないと思うとともに長い文章だが引用する。

自閉症の方や発達障害の方に、なぜ、ウォーキングが有効なのかについてであるが、実践的には幼児期の療育の経験から実証されている。療育初期の頃の子どもは療育部屋に入ると必ずと言っていいほど大声を出して暴れ抵抗する。その時に、ウォーキングを取り入れてから個別療育に入るとスムーズに個別療育ができることを経験から学んだ。



療育部屋に入ることを拒否して泣いている



筆者と一緒に 10 分間のウォーキング



上手に座って「棒入れ」をやっている



「型はめ」も考えながらやっている

理論的には、社会福祉法人五乃神学園々長 芝崎悦子氏の考え方が一番わかりやすい。

脳の階層的構造のポイント

- ① 脳はおおまかに分け「大脳新皮質」「大脳辺縁系」「脳幹」の3つに分けられる。
- ② 人間らしい行動を司るのは上位脳の「大脳新皮質」である。
- ③ 下位脳の「大脳辺縁系」と「脳幹」の構造は他の哺乳類とほとんど違いがない。
- ④ 「大脳新皮質」が活性化することで、「大脳辺縁系」と「脳幹」といった下位脳の活動をコントロールする。
- ⑤ 「大脳新皮質」をしっかり働かせると、意識レベルを高く保て、問題行動が減少する。

(2019年コロロ東京講演会資料より)

つまり、大脳辺縁系や脳幹が優位に働いている時は原始運動や原始反射、超速行動、空にらみ、常同行動が出現する。さらに、快・不快で行動しやすくなる。上位脳の大脳新皮質が活性化すれば目的行動や適応行動ができるようになる。要するに、上位脳の大脳新皮質が働かないと意識レベルが低下し、乳幼児期に見られる反射行動が出現しやすくなる。ここで言う反射行動とは、まる呑みやちびちび食べ、物を口に入れるなどは吸啜反射、つかみかかり、手をつなぎ続けることができないは把握反射、回転するものや動くものを目で追うため目的物から目をそらすのは追視反射、小走りになる、1か所に立ってられないのは足底把握反射、つま先歩きや前傾姿勢で歩く、道路への飛び出し、歩かないなどは交叉性伸長反射、周期的に手足をばたばたさせるのは原始反射など成長するとともに消失する反射反応が消失せずに残っているためにおきる反射である。大脳新皮質を優位にした状態になれば意識レベルが上がり行動問題が減少していくという考え方である。上位脳を働かせて行動問題を少なくさせるためには、①歩くこと ②目と手を使うこと ③体幹保持ができること（良い姿勢）④意図的に待つことができることであると社会福祉法人五乃神学園々長の芝崎悦子氏は力説する。

前述の考え方を基本に、コスモスでは単なる「散歩」から「ウォーキング」に切り替えている。ウォーキングは集団でやるのが最も効果があり人手を削減することもでき一石二鳥である。しかし、コスモスではまだまだ実践できる状態ではない。原因は母集団がしっかりしていないためである。母集団がしっかりとウォーキングできるようになると母集団につられて新しく加わった利用者様もついつい上手に歩けるようになる。では、上手に歩くとはどういう状態なのかを説明する。

上手に歩けるとは、集団での歩く速さを守り、前を歩く人を意識し、順番や自分の位置を判断しながら、まっすぐ前を見て、1人で歩けるようになることである。

コスモスでは、小集団でウォーキングを可能にするためにしっかりした母集団をつくらうとしている。そのために、段階を経て上手なウォーキングの方法を一人一人の利用者様が獲得できるようにスタッフは努力している。

①1対1対応歩き



スタッフの歩く速さを守り、前方を見ながら手を離さずに歩く。スタッフが気をつけたいことは、並み歩きなので、利用者様の右足が前に出る時にスタッフの左足が前に出るようにしたい。(利用者様の身体が左右にぶれるのを防ぐため) また、利用者様の右手がフリーになるとガードレールをさわったり草花を握ったりするので小さな手さげ袋を持たせることも一つの方法である。

②1対2対応歩き



手をつなぐことなく、同じ間隔で相手の位置を確認しながらスタッフのペースで歩く。利用者様の並ぶ順番を変えても歩けるようにしたい。声出しや道路わきの草木を握るなどは勿論厳禁。スタッフは利用者様より少し道路側を歩き前後の視界を広めると共に、後方からの車に対して利用者様を守ることも忘れない。

③小集団歩き



手つなぎ歩き、2人歩き、3人歩きができるようになったら、小集団歩きに挑戦する。ここでは集団の歩く速さを守るため先頭を歩くスタッフはすべての状況を理解しながら歩く速さをつくっていく。具体的には、後方が遅れていないか確認し、アイコンタクトで進行方向や危険箇所、自動車の有無等を知らせる。右側歩行を基本にガードレールや草花、塀などを見極め、適切な位置を調整しながら歩くことも考えていく。後方のスタッフは列の間隔をチェックし、必要に応じて先頭のスタッフに状況を知らせる。また、集団全体としてまとまっているかを把握しながら、列から外れる利用者様を支援する。

コスモスでは、大集団でのウォーキングはできていないが、小集団を組み合わせたウォーキングは理論的には可能である。集団でのウォーキングができるようになれば、発達障害者が抱えている課題を一つ一つ解決するための基礎の部分構築できると信じている。

「基礎の部分」とは乱暴な言い方をするとウォーキングをすることで上位脳である大脳新皮質が活性化する。大脳新皮質が活性化されたところで受注作業や個別課題、創作活動等を行うことにより効果的に活動ができるということである。

特別支援学校学習指導要領第2章第3節の自立活動には6区分27項目の自立するための活動が詳しく記されている。この自立活動を進めるにあたり、多くの特別支援学校ではウォーキングを取り入れている。京都府立中丹特別支援学校教諭 竹内理恵氏は、集団で歩行することの意義として「心理的な安定を図り、学習に向かう基礎となる力を育てていく活動として、毎日一定時間ねらいをもって取り組むことが効果的である」「集団で歩くことで、常にモデルが周囲にあり、今何をすればいいのかが見てとれる。」と主張する。

コスモスのスタッフはウォーキングの意義を理解し、利用者様のために散歩ではなくウォーキングをこれからも面々と続けていくことを願ってやまない。

尚恵学園 障害福祉サービス「コスモス」における発達障害者の支援に関する実践的研究より引用

上記の論文が2020年に発表されているので「コスモス」におけるウォーキングは、改善策を講じてから約4年が過ぎている。どのように変わってきたかを説明する。

小幡支援員が利用者様4人とウォーキングする場合の風景である。参加する利用者様によって歩く列の順番を変えていくことをまず考える。具体的には利用者様の歩く特徴と性格そして当日の身体の調子を見極め、瞬時に利用者Z様は前、2番目は利用者Y様、3番目は利用者X様、最後尾は利用者W様と決めるのである。さらに支援員が前に付くか、後ろに付くか、中ほどに付くかなども判断していく。歩き始めると声かけは最小限にとどめる。余計な会話や言葉かけは利用者様の意識レベルを下げるからである。歩く速度はかなり速い。筆者が初めて同行した時は体力の限界を感じ5メートルほど離された時があった。この調子で60分から90分ウォーキングを続けるのである。このようなウォーキングを続けると利用者様が小集団で上手に歩けるようになってくる。そして、この小集団が母集団となって行動問題を起こしながら歩く利用者様を包み込んでいく

のである。例として2点あげる。1点目は、ウォーキングを嫌って、支援員に唾をかけたり、叩いたり、靴を投げたりといつも大暴れした利用者K様についてであるが、小幡支援員が小集団でウォーキングするときにウォーキングを嫌う利用者K様を小集団の最後尾に連れて行き歩かせたのである。時には小幡支援員と利用者K様が手をつないで歩くこともあった。筆者の記憶では約2~3週間は利用者K様が自分の履いていた靴をハス田に投げ入れるなどの行動問題が起きていた。しかし、ある日突然、小集団の最後尾で利用者K様は一定のリズムを刻んで歩いたのである。利用者K様はウォーキングが出来るようになったのである。この件を利用者K様の母親に連絡帳を通じて報告すると「私とは絶対一緒に歩くことはありません。しかも、支援員様と手を繋いで歩くとは感激です。私とはこの子は手をつなごうとはしません」との返事が連絡帳に書かれてあった。小幡支援員から連絡帳を見せられ自分のことのように喜んだことを思い出す。のちに、ほかの支援員とも利用者K様はウォーキングが出来るようになった。今では筆者ともウォーキングが出来るようになった。この件は、まさしく母集団が形成されその力が及んだものと推測する。2点目は母集団を積極的に利用した例である。小幡支援員のグループの後を筆者のグループが歩いていく。いつまでも後をつけて歩くのではなく最初の5分~15分間くらいで十分である。整然と歩く小幡支援員のグループが母集団となって、筆者のグループに影響を与えるのである。それでも行動問題が出現し上手に歩けない利用者様は、小幡支援員のグループに入れていただく方法をとっている。良い見本の中で行動を共にすれば必ず行動問題が減少し再び筆者のグループに入っても上手に歩けるようになる。このように根気強く活動を続けることで利用者様と支援員の双方が小集団におけるウォーキングのスキルを高めていくことになる。

「コスモス」におけるウォーキングは、4年前頃のウォーキングの様子と比べると確かに変わってきた。利用者様の行動問題がはるかに少なくなってきたのである。「コスモス」に昨年から加わった中村支援員も母集団の重要性を認識し、利用者様の様子をつぶさに観察しながら日々のウォーキングを実施している。この2人の支援員に共通することは利用者様に対する愛情のもと利用者様に対して「指示が入る」ということである。繰り返すが、他の支援員も粛々とウォーキングを行い、利用者様に対して「指示が入る」こととなり利用者様の行動問題が激減した。このことは母集団の効果として強調したい。



②運動プログラム

運動プログラムを始めたきっかけは、12年前にサービス管理者から、「午前中の活動の時間に身体を動かす活動を考えてほしい」と言われたことがきっかけである。当時は公立小学校の職員を退職したばかりで障害者支援に悩んでいた時期でもあった。小学校教諭時代の「指導する」という考えが身体中にしみ込んでいたため、利用者様から唾をかけられたり叩かれたりすることが日常的に行なわれていた。菊地支援員から「あなたの言動は教育的で上から目線です」と何度も指導されたことを思い出す。しかも、「コスモス」での支援と並行して障害を持つ幼児35人の個別療育を2人の支援員と共に担当していた。さらに、月2回程度、障害を持つ幼児・児童の集団療育を4人の支援員と筑波大学や川村学園女子大学の学生と共に担当していた。このような時期にサービス管理者から依頼されたのである。

筆者がまず考えたのは、月2回程度実施した集団療育でのサーキット運動を参考に
した。サーキット運動を基盤に小学校低学年の体育の要素を取り入れてプログラムを組んだ。当時の幼児・児童の集団療育時の画像を添付する。



幼児の集団療育（音楽に合わせて歩行）



幼児の集団療育（手をつないで）



児童の集団療育（ボール運動）



児童の集団療育（サーキット運動）

幼児・児童の集団療育の要素を取り入れた活動「サーキット」運動を始めたが利用者様の動きがしっくりしない。一つ一つの運動の動作が上手に出来ない。そこで「サーキット」は1対1対応でやることにした。長い時間がかかったが多くの支援員の努力で利用者様に受け入れられるようになった。4年前の画像を添付する。



1対1で行なうサーキット運動は「ミニサーキット」と名称を変えた

「ミニサーキット」は現在「コスモス」においては、身体的な障害の重い利用者様の機能訓練的な色彩が濃い活動である。話を元に戻すが、サーキット運動が多くの利用者様にうまく機能しないとなると次の手を考えなければならない。そこで生み出されたのが「運動プログラム」である。運動プログラムの内容はコロロ発達療育センターのダイナミックリズムからヒントを得て作られた。運動プログラムにおいても当初は惨憺たるものだった。当時の様子が2020年に発表した論文『尚恵学園 障害福祉サービス「コスモス」における発達障害者の支援に関する実践的研究』に載せられているので引用する。

「運動プログラムは」8年前に、水曜日の午後の1時間何かやることを考えてほしいとの相談から始まった活動である。尚恵学園に奉職したばかりの筆者は考えた挙句、清掃活動以外に集団活動がほとんどなかったコスモスで、集団活動を取り入れたプログラムを模索した。体育・音楽・道徳の内容を60分間で利用者様が飽きることなく、豊富な運動量があり、適度に楽しめてSST (social skills training) の内容も含むプログラムを組んだ。

当初は、集団をどのように動かすかということがスタッフ内で共通理解ができていなかった。全体把握をする意味すらも理解されていなかった。全体把握とは1人の利用者様の支援を行う時に、その利用者様を取りまく集団全体を視界の中に収めながら対応していくことである。例えば、昼食時にスタッフ4人で利用者様を支援する場合、1人のスタッフが12人の利用者様の様子を把握した上で、1人の利用者様の個別のニーズに対応することである。厳しい言い方をすれば12人の利用者様の様子を把握した上で、自分自身も含めた4人のスタッフの動きも把握しなければならない。つまり、このように対応するスタッフが1人ではなく4人いることになる。筆者は、2013年4月には、この考え方を十分に理解しておらず運動プログラムを始めた。リーダーのみが孤軍奮闘していたのである。しかも、集団の中にお手本となる母集団が育っていなかった。それでも、リーダーは強引に運動プログラムを続けていたのである。

2014年のある日、コスモスの管理者に通りすがり「運動をやっている方は〇〇様だけです。」と、にこにこ顔で言われたことが悔しくて、その夜は眠れなかった記憶がある。確かに利用者様全員が一緒になって運動をしていたことはなかった。2人～3人の利用者様が運動をやっていたにすぎなかった。集団活動を嫌がりテラスに駆け込む利用者様を追いかけるスタッフの姿もあった。長い年月を経て、今年4月、新人スタッフに「ふだん何もできないと思っていた利用者様がこんなに活動できるとは驚きました」と言われた時は、うれしくて「管理者見に来てください。」と思わず心の中で叫んだ筆者がいた。このことは、利用者様も成長してきたと共に、スタッフも全体把握の意味を理解し、集団の中で個別のニーズに応えることができる支援技術を身に付け実践できるようになってきたと、確信している。



運動プログラム (準備体操)



運動プログラム（ブロックを使った運動）

尚恵学園 障害福祉サービス「コスモス」における発達障害者の支援に関する実践的研究より引用

運動プログラムについての前置きが長くなったが、現在行われている運動プログラムは母集団を中心に多くの活動が考えられている。1つ1つの活動にしっかりした目標を掲げその目標に向かって支援員は努力している。運動プログラムは120分程度の内容で組織されている。120分の活動内容は1つの活動が10分から15分のモジュール（活動全体の部分）になっている。その日の利用者様の様子や参加人数、男女比、支援員の数、活動時間等を考慮しながら、リーダーは数あるモジュールを組み合わせて当日の運動プログラムを展開する仕組みになっている。40分～70分展開する。

運動プログラムのモジュールは大きく分けて8つある。それぞれのモジュールにそれぞれ

目標があるが達成すれば次の目標を掲げる。各モジュールを説明する。

①いすに座って身体の一部を動かす。

*目標：支援員を見て模倣ができる。手や足、指の細かい動作の習得



②音楽に合わせて歩行し、音楽が止まったら制止する活動

*目標：支援員の指示が入る（ウォーキング中の危険回避）



③ 静かな音楽で床の上に大の字になる。

*目標：支援員の指示が入る（嫌なことでも我慢する）



④ サーキット活動

*目標：大脳新皮質の活性化



⑤模倣運動

*目標：身体の巧緻性を養う



⑥集中課題

*目標：決められた席にじっと座ることができる



⑦ブロックを使った運動(1)

*目標：身体を動かさず静止できる（待つことができる・体幹保持）



⑧ブロックを使った運動(2)

*目標：体力保持



運動プログラムにおいては長い時間をかけ多くの支援員の方々の努力で、母集団が出来上がり常に安定した活動ができるようになってきた。利用者様は特定の支援員だけではなく係わっているすべての支援人の指示が入るようになってきた。運動プログラムの成果は「コスモス」における昼休みの利用者様の過ごし方に劇的な変化をもたらした。詳しくは、3「余暇活動」における実践で述べる。

2 昼食時間における実践



6年前頃の昼食風景

コロナが日本中で蔓延する前までは、「コスモス」では昼食の時間は上記写真のように1つのテーブルに対面で2人～4人座っていた。介助が必要な利用者様に対しては支援員が横に座り介助をしていた。「コスモス」の場合、昼食時は支援員の半数が休憩を取るため通常の支援員の半数で昼食の支援に当たっている。1対1で支援に当たる支援員は5人、全体を支援していく支援員は2人、最低でも7人の支援員で利用者様を支援していた。筆者が「コスモス」に配属された頃は、休憩中の支援員の方々が利用者様と一緒に食事をしていたため、休憩中にもかかわらず食事を中断して利用者様の支援に当たることが日常的に見られた。このため昼食中は比較的静かな時間が流れていた。

筆者は、当時、気になることが1点だけあった。利用者様が食べ物をよくこぼすのである。全体を支援する支援員は利用者様がテーブルの上や床にこぼしたものをきれいに拭き取る作業が主なものとなっていた。ある日、1人の支援員が「こぼさず上手に食べられるように工夫しませんか」と提案したことがあった。筆者は提案を持ちかけられた職員の言葉が今でも忘れない。その職員は「利用者様がこぼすことは当たり前ではないですか。こぼしたものをきれいに片づけるのが支援員の仕事ですよ」と提案した支援員に向けて話かけていた。全身に違和感という電気が走ったことも忘れない。この場合も、「利用者様が家族と一緒にレストランで食事をするができる」という目標を立てれば支援員は迷うことはない。その後、支援員の多くは利用者様が少しでも上手に食べられるようにと奮闘している姿が見られる様になったと感じているのは筆者だけだろうか。当時のことはこれくらいにして現在の昼食時間における実践を述べる。

コロナが日本中に蔓延してから食堂のテーブルの配置は対面式をやめ、できるだけ壁に向かって座るように変えた。食堂の配置換えは意外にも利用者様の支援という観点から考えていくと効率的な配置だとやってみてから思った。支援員が歩くスペースが広くなったのである。さらに、食堂全体が把握しやすいレイアウトになった。

10年前～6年前までの1対1で支援に当たる支援員は5人、全体を支援していく支援員は2人、最低でも7人の支援員で利用者様を支援していた。という支援員の数は現在では確保されなくなった。主な理由は「コスモス」職員がプレイホールの利用者様も支援することになったことと療育担当の職員がいなくなったことに起因する。当時、利用者様の昼食時における行動問題が多くなり、筆者は支援員の前休憩時間を11:00～12:00、後休憩を12:30～13:30として12:00～12:30の利用者様の食事支援をすべての支援員で対応することを提案したが、「コスモス」の運営上他の活動に負担がかかることが判明し実現しなかった。12月下旬の某日は昼食時間において4人の支援員だけで利用者様を支援していた。下の写真を見てもわかるように利用者様は穏やかな表情で上手に箸やスプーンを使って食事をしている様子が見て取れる。この件で理解していただけたと思うが、支援内容の改善策には支援員の数ではないことが実証されたと思っている。



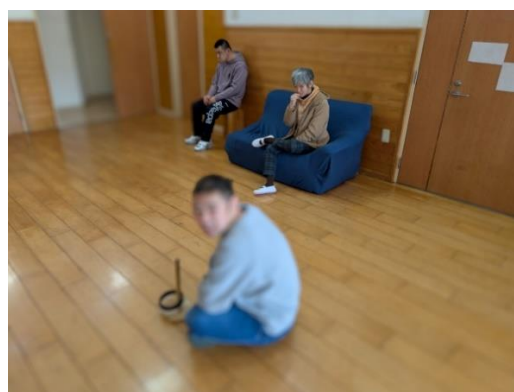
昼食時間の風景がこれほどまでに穏やかな時間として流れるようになったのは、ウォーキングや運動プログラムの効果が大きいと考えている。何度も繰り返すが模範的な行動をする母集団が育ちその集団が大きくなってきたからである。しかし、昼食時間における課題はたくさん残っている。前述した、こぼさず食べることにしてもその1つである。支援員は色々と工夫している。介護皿（皿のふちの1部が三日月形に盛り上がっている）を使用して効果が表れるのはスプーンを使用している利用者様の中でもわずかな方だけである。そこで考案されたのがよくこぼす方は茶碗ではなくどんぶりを使用することである。筆者のような高齢で和食好きな者が一見すると見栄えはすこぶる悪い。支援員の評判も良くはない。しかし、こぼさず食べることに於いて効果は顕著であった。箸やスプーンが上手に使えるようになるまでの一時的な手だてと考え、管理者から寛大な処置として許可をもらっている。さらに、利用者様の特性に合わせてスプーンの角度を変えて使用していただくことも忘れない。また、テーブルの高さを調節することも実践している。このように、日々の支援員における創意工夫を通して利用者様の食生活改善に寄与している。この昼食時間の利用者様のスキルアップが、誕生日会や夏祭り、クリスマス会、成人式などのイベントにおける会食時に影響を与えるようになってきた。



食べやすいように柄の角度を変えたスプーン

3 余暇活動における実践

まずは下の画像を見ていただきたい。昼食後の 60 分間の休憩時間の様子である。



「コスモス」で長い間利用者様と生活を共にした支援員は今の昼食後の利用者様の様子を見て何を思うだろうか。筆者は昨年 6 月までの 3 年間で、昼食後の 60 分間はプレイホールで利用者様と過ごしていたため「コスモス」での利用者様の行動の変化は詳細にはわからない。しかし、最近 6 カ月間の利用者様の様子を見てみると 7 年前頃の様子と劇的に変わっている。利用者様がそれぞれ自分の思いで自分がやりたいことを見つけ穏やかに過ごすことができるようになってきた。通常昼食後の休憩時間は、作業室 1 とホール・日常訓練室・作業室 2 ・テラスと歯磨き支援の 3 領域を 3 人の支援員で担当する。以前は多くの支援員が常に利用者様一人一人がどこにいるのか、何をやっているのか、どこに移動したのかなど神経をすり減らしながら利用者様を見守っていたことを思い出す。

1 月 16 日、作業室 1 を小幡支援員、ホール・日常訓練室・作業室 2 ・テラスを筆者、歯磨き支援を小松崎支援員が担当していた時のことである。作業室 1 に利用者様がポツリポツリと移動して筆者が担当しているエリアにはほぼ利用者様がいなくなり、作業室 1 に 10 人以上もの利用者様が穏やかにそれぞれのスタイルで過ごしている風景を見た。小幡支援員は「すごいだろ すごいだろ」と言って満面の笑みを浮かべていた。小幡支援員だけではなく渡邊支援員や中村支援員のときも同じような風景が見られるようにな

ってきた。さらに、14時45分～15時30分までのお迎えを待つ時間の過ごし方にも変化が起きてきた。穏やかに時間が過ぎていくのである。このことも、大きな母集団が形成された影響と考えている。

4 「活動の時間」における課題

細かいところまで見ていくと数限りない課題が浮きぼりになってくるが、大きな課題としては2点あげられる。1点目は前述したように、午前・午後に行われる活動の固定化である。利用者様の多くは自閉症スペクトラム症の特徴である、人とのコミュニケーションが苦手であるとか物事に強いこだわりがあるといった発達障害を抱えている。活動の固定化がされれば利用者様は安心して「活動の時間」を過ごすことができると推測する。利用者様の強いこだわりを生かした支援ができるからである。1日でも早く実現したい。2点目は「活動の時間」に室内作業を取り入れることである。筆者が「コスモス」に配属された頃は利用者様がそれぞれできる作業にあわせて、ソフトボール洗い、ボールの袋詰め（ボールを数える）、筆記用具の箱詰め、筆記用具の袋詰めなどの受注作業をやっていた。受注作業が難しい利用者様はボールペンの組み立て、割箸の袋詰めなどの受注作業につながるような作業をやっていた。室内作業にはワークシステムが取り入れられ支援員はジョブコーチとなり共生社会を目指して取り組んでいた。ここで論じる気持ちはないが、利用者様が仕事をすることは社会とのつながりができることだと筆者は思っている。「コスモス」における室内作業が数年前に突然廃止になった詳しい理由はわからないが復活を切に望んでいる。利用者様は支援員の様子を見てお手伝いをするようになった。次ページの映像を見て、彼らに仕事を提供したいと思うのは筆者だけだろうか。



昼食のためのテーブル拭き



食堂の椅子おろし



昼食の用意



洗濯干し



玄関掃除

クリスマス会

尚恵学園「コスモス」における日常支援がどのように改善されてきたかを述べてきた。ここでは、日常活動の改善に伴い利用者様が身につけていったスキルをどのようにクリスマス会において発揮していったかについて論じていく。

1 クリスマス会準備

渡邊支援員が担当になり計画を立てていた。昨年度実施したクリスマス会を参考にどのように展開するか悩んでいた時期である。さらに、12月25日は出勤する支援員が少ないことが判明した。実施日を前倒しするにも25日の㈱メフォス様が提供する昼食のクリスマスバージョンメニューを変えるわけにもいかず強行することになった。当初、クリスマス会に計画段階から準備そして実施まで係わることができる支援員は5人だったが後に

人になる。利用者様はプレイホールも参加することとなり 21 人となった。渡邊支援員は、「副管理者から川島さんと相談しながら進めてください」と言われましたと困った様子で筆者のところに来た。筆者は渡邊支援員に「クリスマス会を昨年度と同じように計画するから難しくなる。支援員が少ないのならそれなりにやればいいのです。」と話したが納得はしない。そこで、苦肉の策でクリスマス会活動案を渡邊支援員とつくることにした。

幸いにもホールの装飾は大泉支援員と小松崎支援員が中心となって多くの支援員と制作班の利用者様の協力で素晴らしいクリスマスバージョンの装飾が壁いっぱいに展開されている。筆者は昨年まではホールでのみでクリスマス会を実施したが今回は作業室 2 も使用したいと小松崎支援員に遠慮がちに話した。すると、即座に制作班の利用者様の作品を利用して作業室 2 の壁いっぱいに装飾を施してくれた。これで環境は整った。



制作班の制作風景



制作班の作品を利用して飾り付け（ホール）



ホールの壁



作業室 2 は 360 度飾り付け（正面）

話は前後するが、クリスマス活動案を考えるととても悩んだ。渡邊支援員に苦し紛れに言った言葉が頭をよぎる。「支援員が少ないならそれなりにやればいいのです。」この言葉の裏には 1 曲～2 曲クリスマスの歌を歌ってケーキを食べればそれでよいと

い

う投げやりになった筆者がいた。投げやりになった訳は些細なことなのだが今となってはどうでもよい。渡邊支援員の困った顔が頭から離れない。色々なアイデアは浮かぶのだが支援員の少なさがネックになる。考え抜いた挙句の果てに思いついたのは利用者様が長い時間をかけて身につけたスキルを、十分に発揮できるようなクリスマス会にしたいということだった。つまり、普段やっていることをクリスマスバージョンに変えれば支援員にも利用者様にも負担をかけることはない。出来ることならば、クリスマス会での利用者様の様子を、ワンサイドミラー越しに保護者様にも公開したいなどと勝手に思った。夢は膨らむばかりである。さっそく、渡邊支援員と筆者はウォーキング、運動プログラム、学習プログラム、ミニサーキット、音楽活動、集中課題、昼食などの活動を取り入れたクリスマス会活動案を考えることになる。クリスマス会活動案をつくる時、目標は下記の 2 点とした。 ①楽しく過ごすことができる ②利用者様が身につけた

ス

スキルを発揮することができる場を設ける。である。2 日間かけてじっくりとクリスマス会活動案と会場配置図を作り上げた。クリスマス会活動案と会場配置図を関係する支援員に提示するが、支援員の細かい動きが理解できないとの意見が出た。クリスマス会当日、参加することになった小幡支援員の提案でモジュールの一つ一つについて支援員の動き、利用者様の活動状況、会場配置などをリハーサルすることになった。管理者は 45 分間のリハーサルを快く承諾してくれた。リハーサル参加者は小幡支援員、小松崎支援員、石渡支援員と筆者の 4 人だけだったが充分である。会場設置(4 場面)、利用者様の誘導と見守り、各モジュールにより変わる支援員の配置、歌の確認、利用者様の突然のパニック対応なども視野に入れ 12 月 20 日にリハーサルは終わった。

クリスマス会活動案

2024.12.25 実施

時 配	活 動 内 容	支援員の動きと配慮事項
13:00	・利用者様は各部屋に待機	・会場配置図に従って会場をつくる
13:05	・利用者様はホワイトボード前に移動(作業室 2)	・速やかに利用者様をホワイトボード前に座らせる(作業室 2) ・支援員は利用者様の後方から支援する

13:10	<p>歌を聴く</p> <ul style="list-style-type: none"> * 川島 w は英語で話しかける * 川島 w は聖夜とジングルベルを英語で歌う * 川島 w の声かけで利用者様はホールへ移動開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援員は利用者様の後方から支援する (利用者様を立たせたり声を出させたりしないよう配慮する) ・ 小幡 w はホールへ移動する ・ 小松崎 w はホール西側に椅子を 3 つ設置 ・ 川島 w はホール東側に椅子を 3 つ設置 ・ 石渡 w は作業室 2 を最終チェック
13:15	<p>ホール内を楽しく歩く</p> <ul style="list-style-type: none"> * 小幡 w はクリスマスソングをホールに流す ・ 利用者様は音楽に合わせてホール内を歩く * 川島 w の声かけでホワイトボード前に座らせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援員は利用者様と一緒に歩く ○ 出来るだけ手を繋がず一人で歩くようにする ○ 人数が多いのでかたまらないように配慮する ○ 歩くのを嫌がる方は日常訓練室に待機 * 砂山 w は配膳準備
13:25	<p>パネルシアター1を観る</p> <ul style="list-style-type: none"> * パネルシアター (カエルとサンタ) ・ 小幡 w と川島 w が担当 ・ カエルの歌の輪唱部分で小幡 w がアシスト (気分転換の手品: 水をジュースに変化) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援員は利用者様の後方から支援する (利用者様を立たせたり声を出させたりしないよう配慮する) * 支援員はカエルの歌を大きな声で歌う
13:35	<p>パネルシアター2を観る</p> <ul style="list-style-type: none"> * パネルシアター (森のサンタクロース) ・ 小幡 w と川島 w 担当 (気分転換の手品: 絵のリンゴやお菓子を本物に変化) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援員は利用者様の後方から歌う (利用者様を立たせたり声を出させたりしないよう配慮する) ・ 支援員は利用者様に代わって、川島 w の質問に答える
13:45	<p>パネルシアター3を観る</p> <ul style="list-style-type: none"> * パネルシアター (10 人のサンタ) ・ 川島 w が担当 (小幡 w が鈴の音をならす) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援員は利用者様の後方から支援する (利用者様を立たせたり声を出させたりしないよう配慮する) ・ 支援員は大きな声で歌う

13:55	<p>サンタクロースからのプレゼント</p> <p>*川島wの呼びかけでのサンタクロース(塚原管理者)がホールから登場する 「メリークリスマス」と言ってプレゼントを効率よく渡す、時間をかけすぎると場が白けるので注意する</p> <p>・利用者様はサンタクロースからプレゼントをもらう</p> <p>・プレゼントを渡したサンタクロースはホールに退出する</p>	<p>・支援員は混乱しないように利用者様を支援する(出来るだけ席を立たせないように配慮する)</p> <p>・支援員はその場で利用者様にプレゼント(お菓子)を食べていただくのでサポートする</p>
14:10	<p>会食(ケーキを食べる)</p> <p>*川島wの声かけで利用者様は手を洗う</p> <p>*塚原管理者のあいさつの後でケーキ、飲み物を飲食する 「メリークリスマス」ケーキはサンタからのプレゼントです どうぞ召し上がれ!</p> <p>*ケーキを食べ終わった利用者様から休憩</p>	<p>・支援員は手際よく、手を洗った利用者様をテーブルに座らせる(「手をお膝」を徹底し勝手にケーキを食べさせない)</p> <p>・支援員は混乱しないように利用者様を支援する</p> <p>*支援員は状況に合わせて利用者様を見守るとともに会場を通常位置に復帰させる</p> <p>*砂山wは会食の後始末をする</p>
14:50 ～ 16:00	<p>プレゼントをもらって帰宅</p> <p>*帰宅する利用者様へ塚原管理者はプレゼントを渡す</p>	<p>*支援員はプレゼントを渡すためにサポートする</p>

用意するもの

- | | | |
|-------------------------------------------|--------------------------------------|------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> サンタクロースが配るお菓子 | <input type="checkbox"/> サンタクロース衣装 | <input type="checkbox"/> サンタクロースの鈴 |
| <input type="checkbox"/> 利用者様の帰宅時に渡すプレゼント | <input type="checkbox"/> クリスマスソングBGM | <input type="checkbox"/> パネルシアター |
| <input type="checkbox"/> 飲み物(ペットボトル等) | <input type="checkbox"/> 支援員用三角帽子 | <input type="checkbox"/> タンバリン |
| <input type="checkbox"/> ショートケーキ(久月) | | |

2 クリスマス会の実践

利用者様に楽しかったとあっていただくには、サービスを提供する支援員の失敗は許されない。完璧な動きが要求される。出来て当たり前という雰囲気が「コスモス」に流れていたため渡邊支援員と筆者にかかる重圧は相当なものになった。休憩時間はすべてホワイ

トボードのある相談室にひきこもり、歌の練習とパネルシアターの動作確認に時間を費やした。クリスマス会に向けてやることはすべてやった。あとは実践することだけである。

クリスマス活動案に従ってクリスマス会での利用者様の様子を解説していく。支援員の数が充分でなかったため利用者様の様子が分かる写真が撮れなかった。さらに、モジュール4の「ホール内を楽しく歩く」の写真は利用者様が楽しく歩いていただくことに支援員は専念し写真が撮れなかったため画像はない。

モジュール1（会場設置）

13時00分、利用者様の休息時間が終了した。小幡支援員、小松崎支援員、筆者はリハーサル通りに利用者様を支援しながらホールのソファ3台を日常訓練室に収納、21人分の机と椅子をホール中央に設置、作業室2に21人分の椅子とホワイトボードを設置した。後休憩の支援員が「コスモス」に戻ってくると同時に、協力していただき時間内に終了する。

モジュール2（利用者様が作業室2に移動する）

支援員の声かけに応じて決められた椅子に座ることは、運動プログラムの集中課題で常時経験しているので利用者様はスキルとして身に付いている。21人の利用者様が出来るわけではないがここでも母集団が力を発揮する。10人ほどの利用者様が支援員の声かけに応じて決められた場所に座る風景を見て、初めて経験する利用者様も上手に座ることができる。ここでは10人ほどの母集団も作業室2では初めての経験である。多くの支援員は当たり前のように思っているかもしれない。しかし、筆者は10年前頃の「コスモス」の様子と比べてしまい涙が出るほど感激している。小幡支援員、小松崎支援員、石渡支援員が中心となって進めた。



モジュール3（歌を聴く）

菊地支援員と療育を担当しているときに学んだことだが「意味がわからない時でもじっとしていることができる」というスキルである。このような場面は我々にもたびたび訪れる。例えば、お寺での法事である。僧侶が経金や木魚の音と共に経を唱える。それらに対

して深い意味はわからない。それでもじっと頭を垂れて座り続ける。利用者様も社会に出れば法事だけでなく、教会での礼拝、電車を待つ時間、レジで並ぶなど多くの試練が待ち受ける。このため、学習プログラムや運動プログラム・集中課題で待つことや体幹保持、理由もなく椅子から離れないなど多くのことを学んできた。モジュール 3 では、筆者がサンタクロースになり英語で話しかけ、利用者様と支援員は英語で答えていただく場面である。しかも、英語で歌を歌うという場面も設けた。言葉はわからなくても、その場の雰囲気でのどのようにふるまえばよいかを考えて行動する場面である。前述した学習プログラムや運動プログラムで身につけたスキルを発揮する場面である。モジュール 3 では見事に

成
功した。支援員は歌舞伎の黒子同様に利用者様を蔭から支えながら英語を使って話し、歌う姿には頭が下がった。



モジュール 4 (ホール内を楽しく歩く)

音楽に合わせてホール内を歩くことは、ウォーキングや運動プログラムそして学習プログラムで実践しているのでさほど心配することはなかった。ただ課題としては、サンタクロースを探しに行こうという設定なので利用者様にどれくらい理解していただいたかがわからない。小幡支援員の即興の振り付けで楽しく踊ったり、手を挙げたり、足でステップを踏むなど 21 人の利用者様が他の人との間隔を上手に保ちながら歩くことができた。

歩く様子を第三者の眼で見ると簡単で何の変哲もないように見えるに違いない。しかし、強度行動障害を抱え、強いこだわりを持った方たちが周りを気にしながら歩く姿を見ると日常的に実施しているウォーキングの成果だと思わざるを得ない。

モジュール 5 (パネルシアター1)

ここでは、音楽活動と集中課題での手遊び歌で利用者様が身につけたスキルを応用した。小幡支援員の歌に合わせて支援員全員が歌い小松崎支援員と筆者がパネルを操作する。利

利用者様の中には身体でリズムを刻み身体いっぱい喜びを表現している姿見られた。音が苦手で両手で耳をふさいでいる利用者様も見られた。あまりにも楽しくなり声を出す利用者様もいた。パネルシアター(カエルとサンタ)が終わり、21人全員と支援員でカエルの歌を輪唱した時は圧巻だった。利用者様の一人一人の顔が忘れられない。



モジュール 6 (パネルシアター2)

学習プログラムでの利用者様が質問に答えるという場면을応用したものである。勿論、音楽活動や集中課題で身につけたスキルを発揮していただく場面でもある。小幡支援員を中心に支援員全員の歌に合わせて筆者がパネルを操作する。「キリンさんは首が長くて寒いんだって。どうすればいいの。」の質問に「洋服を着せる」「ふとんをかける」「マフラーを巻く」など利用者様に交じって支援員が真剣に答えている。その様子を見て利用者様も手を挙げて何か答えている様子が見られる。「サンタクロースはみんなにどんなプレゼントを持ってきてくれるかな」という質問でパネルシアター(森のサンタクロース)は終わる。利用者様は席を離れることもなく、奇声を上げることもなく筆者の質問に耳を傾けていた姿が目にと焼きついた。



モジュール 7 (パネルシアター3)

学習プログラムの 1 から 10 までの数詞を唱えるという学習と集中課題の「10人のよい

子」の歌を利用したパネルシアター（10人のサンタ）である。学習プログラムに参加している12人の利用者様は「椅子に座って前を見て話を聞く」というスキルは持っている。学習プログラムに参加したことのない10人の利用者様の動向がとても不安だったがここでも母集団が力を発揮する。利用者様全員が集中してホワイトボードを見つめている。



モジュール 8（サンタクロースからのプレゼント）

塚原管理者がサンタクロースになって、利用者様一人一人にクッキーを手渡す。利用者様は一人として席を立つことなく、サンタクロースが配るクッキーを静かに待つ姿が見られた。これほど整然と待つことができる利用者様を見ると、今までの利用者様への支援の方法は best とは言えないが better だったのではないかと確信した。サンタクロースから利用者様がプレゼントをもらう姿を見て筆者はこれからも頑張ろうと本気で思った。



モジュール 9（会食）

渡邊支援員がホールに21人分の会食会場を設置、砂山支援員が21人のケーキや飲みもの、フォーク等をテーブル上に設定した。利用者様はそれぞれ手を洗い、自分の席に座り、塚原管理者のあいさつ後に「いただきます」で飲食する設定である。今までの誕生日会などイベントでは必ず1人や2人は「いただきます」の挨拶前に食べてしまう利用者様がいた。「仕方ないよね、この子は待てないから」とあきらめていた支援員がいたことも事実である。しかし、昼食時に必ず「いただきます」と「ごちそうさま」の挨拶することを利用者様に教える支援員がいる。支援員の是非を問うのではない。ここでは、待つこ

とができる利用者様がいる。待つことができる利用者様が母集団になって「いただきます」と挨拶してからケーキを食べることを目標とした。当日、支援員の努力が実り 21 人全員が管理者の挨拶が終わるまで待つことができた。勿論、「いただきます」の挨拶もした。



モジュール 10 (プレゼントをもらって帰宅)

利用者様は保護者の方が迎えに来ると玄関にニコニコ顔で走っていく。玄関には渡邊支援員がサンタクロースになって、高橋支援員はオラフになって利用者様にプレゼントを渡していた。利用者様の幸せそうな顔を見ながらそれぞれの支援員はそれぞれの思いで見送っていた。



3 クリスマス会を振り返る

モジュール 5 (パネルシアター1) の終了間際に利用者M様がパニックになった。筆者は極度の緊張からパニックになったのではないかと推察しているが真実はわからない。このような状況が起きた時の対応は考えていた。利用者様のパニックに対して対応に慣れている中村支援員にお願いしていた。中村支援員は即座に対応し周りの利用者様に影響しないように利用者M様に寄り添っていた。落ち着いた利用者M様は会食から再び参加した。

今回のクリスマス会を実施して、モジュールごとに各支援員が創意工夫のもと担当していけば大きな労力を必要とせずにイベントが開催できるような気がした。

おわりに

クリスマス会が終わり利用者様を送り出してから帰宅すると身体が急に重くなりソファ

一に身を投げ出し眼を閉じる。今日のクリスマス会の様子が走馬灯のように頭の中を駆け巡る。「ああすればよかった」「こうすればよかった」と反省することばかりである。「自分が出すぎたよな」と思ったが後の祭りである。なにはともあれ、渡邊支援員に LINE する。

こんにちは 渡邊さんお疲れさまです。
今日は夜勤ですよ。再びお疲れさまです！
クリスマス会良かったと思います。利用者様の方々がじっと座ってることができました。感激です。
利用者様の〇〇さんと〇〇さんは残念でした。小松崎支援員が頑張って対応してくれて頭が下がりました。
また、ケーキを食べるときも全員が「いただきます」まで待たれたことは今までなかったことなのでこれまた感激です。
私も気を使いすぎで疲れましたが今回のクリスマス会は大成功だと思っています。時間があれば論文にしたいと思っています。
今日はお疲れさまでした。

川島

10 数年で「コスモス」は大きく変わってきた。特に、強度行動障害の方が約 9 割を占めているにもかかわらず問題行動の出現が少なくなってきた。このことは、10 数年に渡り「コスモス」にかかわった多くの支援員の努力の賜物と思っている。筆者も多くの支援員の一人であることに誇りを持っている。機会があればなんとか論文に残しておきたいと思っていた矢先に今回のクリスマス会という良い機会に恵まれた。利用者様の優れた所を眼に見える形で引き出したい、日ごろの支援員の努力の成果を認識しあう場にしたいなどと大それたことを考えた。少し強引なところもあったと思っているが支援員の方々が筆者を批判することなく無理なことでも快く応じてくれたことに感謝である。

筆者は利用者様の支援目標を「社会に出て自立して生きること」としている。尚恵学園のホームページの冒頭には『地域と共生し…』という文字が映し出される。そして、『人として当たり前前の生活を一人で送ることが難しい方の生活のお手伝いや、日中の仕事のお手伝いを……』と続く。これらのことを「コスモス」の利用者様にどのようにアプローチしていくべきか管理職の方々の助言をもとに支援員が一丸となって構築していきたい。